



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	いわゆる冠飾句(拡大付加語)をめぐって
Author(s)	山田, 善久
Citation	独語独文学科研究年報, 9, 73-83
Issue Date	1983-01
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/25628">https://hdl.handle.net/2115/25628</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_P73-83.pdf



# いわゆる冠飾句（拡大付加語）をめぐって

山 田 善 久

## 0. 序

筆者は、先の拙稿で、冠飾句（拡大付加語、以下EAと略す）が、単一の付加語形容詞とは語順の点で、異なる行動をとることに着目し、これに対して一つの理論的解明を試みた。その論点を要約すれば、この現象がいわゆる制限的／非制限的用法という意味機能と関わりがあるのではないかというものであった。この考え方の底流には、SmithからMotschに至る初期生成文法の考え方からの影響があったことは否定できない。<sup>2)</sup> しかしながらWeber（1971）のように、こうした意味論的な現象は統語論のレベルとは全く無関係であるという主張<sup>3)</sup> もあり、筆者も最近はこの考え方に近づいてきている。

そこで、本稿では、もう一度このEAの特異な行動を再検討し、この問題についてより妥当な解決策を探ってみたい。

## 1. 冠飾句の現われる位置

問題となるEAの特異な行動とは、このEAが、本来単一の付加語形容詞と同一のパラディグマ系列に属する要素であると考えられるのに、単一の付加語形容詞とは異なり、限定詞的なある種の要素（Quasi-Determinativと呼んでおこう）の前に位置し得るということである。<sup>4)</sup>

Duden-Grammatik（1973）は、名詞の前に位置する付加語の語順として次のようなGrund-schemaを掲げている。<sup>5)</sup>

Artikelwort	adjektivisches Attribut				Substantiv
	1	2	3	4	
diese	weitere		schlechte	schulische	Erfahrung
dieses	andere		neue	steuerliche	Problem
meine	zweite	gestrige	unerwartete		Begegnung mit ihr

この図式で adj. Attr. 3 は、述語的用法が可能な形容詞のクラスで、EAと同一のパラディグマ系列に属すると考えられる。また adj. Attr. 1 は、ここでいう Quasi-Determinativ のクラスで、この図式が示しているように一般に付加語形容詞群の先頭の位置を占める。したがってEA

と Quasi-Determinativ が共起する場合、次のような語順をとるのがふつうである：

(1) die  $\left\{ \begin{array}{l} \text{weiteren} \\ \text{anderen} \\ \text{ersten} \end{array} \right\}$  für mich sehr aufschlußreichen Erfahrungen

しかしこの場合、付加語の位置を入れ替えることが可能である：

(2) die für mich sehr aufschlußreichen  $\left\{ \begin{array}{l} \text{weiteren} \\ \text{anderen} \\ \text{ersten} \end{array} \right\}$  Erfahrungen

以上の weiter-, ander- および序数 (erst-, zweit- ……) の他、Quasi-Determinativ とみなされる主なものとしては、次のような語があげられる：

beid-, viel-, wenig-, 基数 (zwei, drei ……), bestimmt-, gewiß-  
これはいわゆる数形容詞 (Zahladjektiv) のクラス<sup>6)</sup> である。次にこれらについての実例もあげておこう：

(3) die  $\left\{ \begin{array}{l} \text{beiden} \\ \text{vielen} \\ \text{wenigen} \\ \text{zwei} \\ \text{bestimmten} \\ \text{gewissen} \end{array} \right\}$  im Gefängnis gestorbenen Aktivisten

(4) die im Gefängnis gestorbenen  $\left\{ \begin{array}{l} \text{beiden} \\ \text{vielen} \\ \text{wenigen} \\ \text{zwei} \\ \text{bestimmten} \\ \text{gewissen} \end{array} \right\}$  Aktivisten<sup>7)</sup>

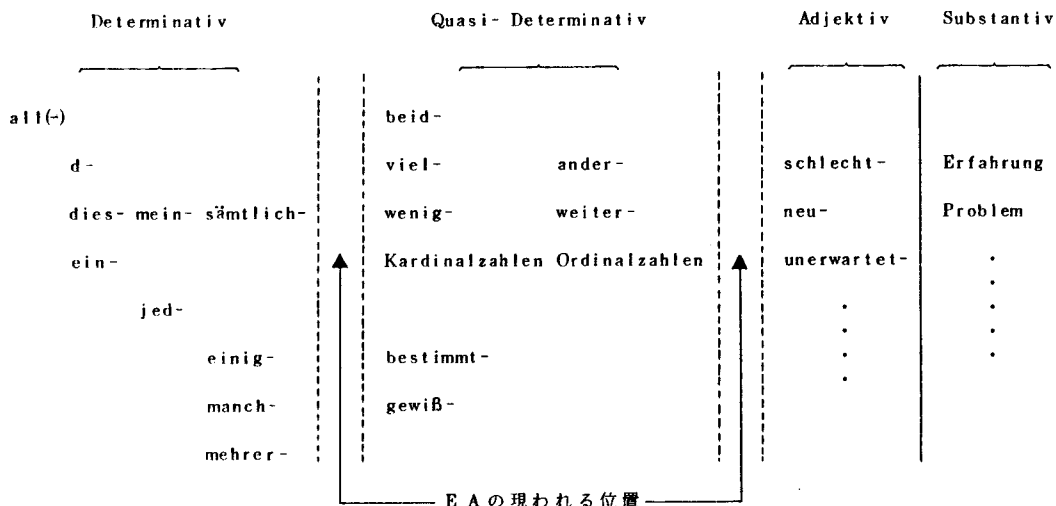
なお同様に数量的な意味をもっているといっても all-, sämtlich- や einig-, manch-, mehrer-  
などは、形容詞ではなく Artikelwort (Determinativ) として扱われるので、<sup>8)</sup> Quasi-Determinativ に含めることはできない。実際これらの要素に EA が先行することはあり得ない：

(5) \*im Gefängnis gestorbene  $\left\{ \begin{array}{l} \text{alle} \\ \text{sämtliche} \\ \text{einige} \\ \text{manche} \\ \text{mehrere} \end{array} \right\}$  Aktivisten

次にEAと単一の付加語形容詞が共起する場合をみると、次例が示すように、EAが単一形容詞に先行するのがふつうである<sup>9)</sup>：

(6) die im Gefängnis gestorbenen { unerschrockenen } Aktivisten  
arabischen }

以上のまとめとしてEAの現われる位置を図式化すると次のようになる。



## 2. 付加語形容詞と冠飾句

標準的な生成文法の考え方では、付加語的修飾句は関係文構造から派生するものと考えられている。つまりEAも単一の付加語形容詞も基底構造に関しては同一であるとみなされる。それでは、どうしてEAと単一形容詞の間に、表面上の現象形態に関して、以上みてきたような差異が認められるのであろうか？

一つの考え方は、これをまったく表面的レベルでの現象とみなすことである。つまり、EAは句の構造をなし、単一形容詞は語である。この外形的な差異が最終的な(表面構造としての)語順に影響を及ぼし、句の構造はQuasi-Determinativの前後に、形態的に一語のものは後にしか現われないとする考え方である。つまりこれを理論的にみるならば、変形部門に不適格な語順をもつ構造を排除する何らかのフィルター機構<sup>10)</sup>を設定しておくだけで事は足りる。

しかしながら、Quasi-Determinativの前に位置し得るのは、このEAのみではなく、ある種の単一形容詞もまたこうした可能性をもつ。例えばgleich-がそうである：

(7) Von den gleichen { beiden } Erfahrungen kann ich dir erzählen.  
vielen }  
zwei }

また、これに類する現象は *solch-*, *derartig-* にもみられる：

- (8) Wir haben { <sup>?</sup> *solche zwei*  
*derartig viele* } Gläser gekauft. <sup>11)</sup>

例(8)のような場合、容認可能性の度合はインフォーマントによって偏りがあり、また *derartig* はこの場合無語尾の形しか許されないので (*\*derartige viele*)、ふつうの形容詞と同等に扱うことはできないように思われる。しかしながら、少なくとも、単一の形容詞で EA の前に位置し得るものがあるという事実は、この問題の根拠をまったく表面的・外形的な要因にのみ求めることに無理があることを示しているように思われる。

もっとよい解決策を考えてみよう。一つの手がかりは、今述べた *gleich-*, *solch-*, *derartig-* といった形容詞には、ある特徴的な意味的パターンがあるということである。つまりこれらは、文脈の前後関係の中で、述べられたり、話題となったり、あるいは前提となっている具体的な特性を指示する働きをもっている。<sup>12)</sup>つまり一種の代用形 (Proform) として機能する：

- { *für mich sehr aufschlußreiche*  
*schlechte* } Erfahrungen
- ↓
- (9) { *gleiche*  
*solche*  
*derartige* } Erfahrungen

そしてこの場合、指示されるものが EA であれ単一形容詞であれ、いずれにせよ文 (命題) に還元できる性質をもっている。このことから *gleich-* のような形容詞は、形態面からは一語であるが、実質的には文内容に相当するものを含意しており、その意味で EA と同一のパラディグマ系列に属する要素と考えることができるように思われる。

さらに、これらの形容詞が副文構造 (*daß*-Satz, 関係文) の補助部を伴い得るという事実も、この主張を強める証拠になるだろう：

- { (a) Es war eine *solche* Kälte, daß sogar die Ostsee zufror. <sup>13)</sup>  
(b) Die Militaristen betreiben eine *solche* Politik, die den Frieden gefährdet. <sup>13)</sup>

(11) Sie trägt das *gleiche* Kleid wie das, das sich Ilse gestern gekauft hat.

(12) Das Auto fuhr mit einer *derartigen* Geschwindigkeit gegen den Baum, daß es schrottreif war. <sup>14)</sup>

なお上例のうち (10) (b) に関して一言しておこう。この例はたまたま見つけた例だが、原典では形容

詞 *solch-* を取って関係文だけにする方がよい旨の記載がある。インフォーマント・テストの結果も *solch-* に強勢を置くという条件で何とか許容される程度のものである。しかしながら、この構造と関係文だけの構造、それにこれらとパラフレーズの関係にあるとみなされる EA の構造を、次のように並置してみると、この場合の *solch-* という形容詞が文の構造（関係文、EA）と関わりをもつ様子がよく理解できるであろう：

- 13 { *eine solche Politik, die den Frieden gefährdet*  
*eine Politik, die den Frieden gefährdet*  
*eine den Frieden gefährdende Politik*

これまでの観察から次のような結論を導き出すことができよう。

「何らかの意味で文につながる要素が、そしてこれのみが、Quasi-Determinativ の前に位置し得る。」

ここで確認しておかなければならないのは、その他の形容詞、つまり Quasi-Determinativ の後に位置するふつう単一形容詞は、従来一般に信じられてきた取り扱いとは異なり、文の構造（つまり関係文構造）とは本質的に関係がないのではないかということである。むしろこれらは付加語形容詞の構造そのものを基底構造と考えた方がよいように思われる。同様の主張は先の拙稿でも述べたが、ここでこの論拠の支えとなる理論的根拠をあげてみることにする。次の例をみてみよう：

- 14 { (a) *ein fleißiger Schüler*  
 (b) *ein Schüler, der fleißig ist*

これら二つの例は、ふつうの生成文法の考え方では、同一の深層構造をもつとされる。つまり同義と解釈されるのであるが、完全に同義であるかといえば、実はそうではない。14(a)はもちろん「(学業に対して) 勤勉な生徒」ということであるが、14(b)の方は、この解釈も場合によっては成り立つけれども、むしろ学業の他にも一般的な性質・人柄の点で「勤勉な<sup>15)</sup>たちの生徒」という解釈がふつうである。こうした付加語形容詞の構造と関係文構造の間に意味的なズレがあることに着目し、これを明らかにしたのは Bolinger (1967) である。彼は 14(a) のような修飾様式を「指示修飾 (reference modification)」、14(b) のような修飾様式を「指示物修飾 (referent modification)」と呼んでいる。<sup>15)</sup> 試みにこの差異を論理記号を使って表すと次のようになるだろう：

- 15 { (a)  $\exists x (\text{FLEISSIG-SCHÜLER}(x))$  勤勉な生徒である  $x$  がいる  
 (b)  $\exists x ((\text{SCHÜLER}(x)) \& (\text{FLEISSIG}(x)))$  勤勉でありかつ生徒である  $x$  がいる

つまり *fleißig-* という形容詞は、前者では *Schüler* という名称そのものに関係しているのに対して、後者では *Schüler* という名称を冠せられている個体としての人物に関係していると考えら

れる。別の言い方をすれば、指示修飾が名称に内包としての特徴をつけ加えることによって名称を特殊化する機能をもつものに対して、指示物修飾は名称の外延の一つを記述するものであると考えられる。

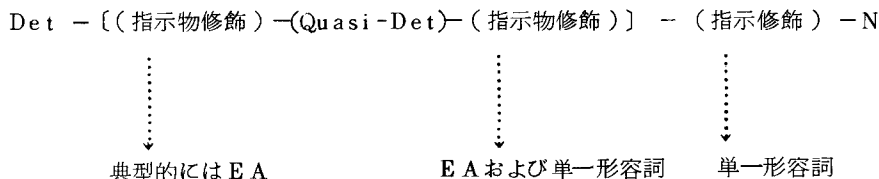
以上述べてきたところから明らかなように、関係文構造はすべて指示物修飾であるといえるが、付加語形容詞については、この指示修飾／指示物修飾の境界が定かではない場合が多い：

- (a) ein großer Mann  
 (b) eine schöne Frau  
 (c) ein hübsches Mädchen

これらの例で、groß-, schön-, hübsch- はそれぞれの名詞によって指示される指示対象の性状を記述している、すなわち指示物修飾であるとも考えられるし、単に名詞に一つの特徴を付加することによって下位概念を生み出す一種の類別のはたらきをしている、すなわち指示修飾として機能しているとも考えられる。前者の場合は、関係文構造が根底にあり、後者の場合は、この付加語形容詞構造そのものが基底構造であるとみなされよう。このように単一の形容詞であっても、根底に関係文構造が想定され得る可能性は当然ある。このことと関連して一つの問題点が生じてくるが、これについては最後のところでふれることにする。

さて以上付加語形容詞に指示修飾／指示物修飾という二つの異なる修飾様式があるということを見てきた。そしてこの差異は先にみた EA と単一の形容詞の対立に、そっくり置きかえて考えることができ、この対立を意味論的観点から補強する論拠になるように思える。換言すれば、この対立は、決して表層のレベルでの現象ではなく、本来深層のレベルで考慮されるべき問題なのである。この深層のレベルでの対立は、Quasi-Determinativ が介在しない場合は目につかないけれども、たまたまこれが現われる際に、その前に位置するか後に位置するかという表面上の差異として顕在化してくるのである。

これまでの議論の要約として名詞句内部の付加語の配列順序の関係を略述すれば、次のようになるう：

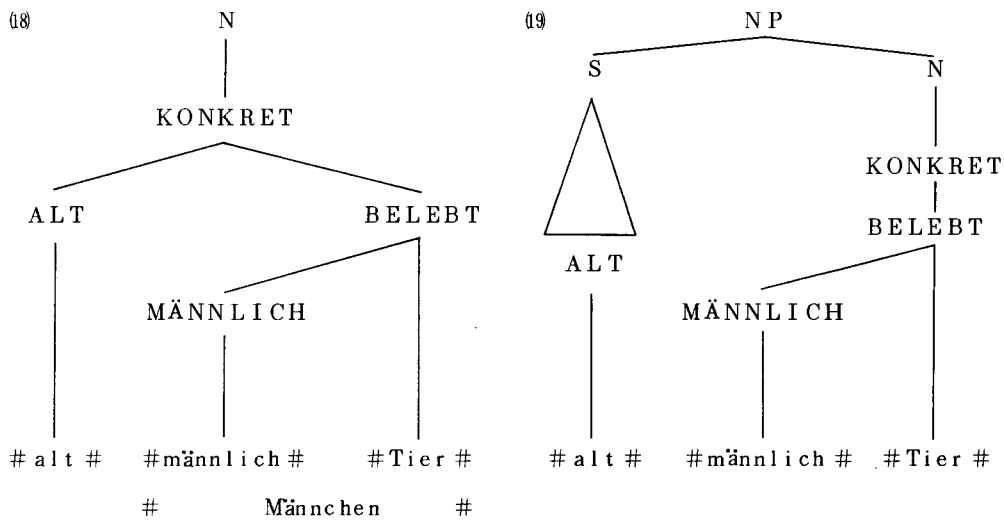


ここでなお、上の配列順序になる必然性を明確に示してくれる論拠を一つ援用しておきたい。

Gruber (1976) は、標準理論で下位範ちゅう化の際に導入される〔± konkret〕、〔± belebt〕などの弁別的素性を、S, NP, VP, N, Vなどの文法的範ちゅう記号と同等にみなし、KONKRET, BELEBTなどもつばら正の値のみをもつ意味的範ちゅう記号を基底部門に導入するという独自の理論を展開している。この関連の中で彼は、付加語形容詞の派生様式についても言及している。<sup>16)</sup> 彼によれば、例えば、

- (17) { (a) das alte männliche Tier  
(b) das alte Männchen

のような句は概略(18)のような基底構造をもつとされる：



(18)でMÄNNLICH, BELEBTにそれぞれ別個の形式素が代入されれば(17(a))になり、単一の形式素が代入されれば(17(b))ようになる。ここで注目し得るのは、MÄNNLICHがBELEBTに支配されており、ALTがさらに上位のカテゴリーであるKONKRETに支配されているということである。これはMÄNNLICHが有生名詞の集合とのみ共起し、ALTがもっと広範に具象名詞のすべての集合と共起し得るといふ各形容詞のカテゴリーの選択的特質を反映したものである。このことから彼は、altとmännlichという二つの形容詞が並べられる場合、(20)にみるような逆順が許容されないという事実を説明しようとしている。

- (20) \*das männliche alte Tier<sup>17)</sup>

しかしながら我々の現在の関連でもっと重要なのは、意味論的に名詞の内包的特徴とみなされるBELEBTとかKONKRETとかいうカテゴリーに形容詞が支配されるという点である。Gruberはそのような議論を全くおこなっていないけれども、これは我々が以上でみてきた指示修飾の形容詞の構造的な特徴を明示的なかたちで表現し得たものと言えないだろうか？ もしこういうふうと考えられるとしたら、もう一つの指示物修飾の形容詞はどのように明示できるだろうか？ 指示

物修飾の形容詞はすでにみたとおり文を含意しており、典型的には関係文のかたちで実現する。ところでこのSというカテゴリー自体は、もちろん選択的な制限はなく、N(名詞)というカテゴリー一般に付加し得るだろう。そこで⑩(a)のalt-を指示修飾ではなく指示物修飾と解釈すると、その構造は⑨のようになるのではないと思われる。この⑨の句構造標識は、付加語の語順が必然的に、指示物修飾→指示修飾→名詞、という順序になることをよく明らかにしていると思う。

最後になお一つの問題についてふれておきたい。⑨もその一例であるが、指示物修飾としてのEAが関係文とパラフレーズの関係にあるならば、関係文から付加語的修飾句という変形の段階で、EAではなく単一の付加語形容詞があらわれる可能性もある。例えば⑫(a)から⑫(b)への派生の過程である：

⑫ { (a) viele Menschen, die fleißig sind →  
 (b) \*fleißige viele Menschen

⑫(b)がノーマルな表現ではないことはどのように説明すべきであろうか？ これは次のように考えることができるように思われる。すなわち、これはこの章の冒頭でもふれるところのあった解決策であるが、⑫(b)の場合、表面構造のレベルでの適格性が問題となっているのではないかということである。つまりfleißig-のような特性記述形容詞(Qualitativa)が単独でQuasi-Determinativの前に位置するような構造は、深層のレベルではともかく、変形部門の出力すなわち表面構造としては、そもそも不適格である<sup>18)</sup>、それゆえ先に述べたような何らかのフィルター機構の働きにより、こうした構造の生成が除外される、ということになる。換言すれば、この問題は文法性(Grammatikalität)の問題ではなく容認可能性(Akzeptabilität)の問題、すなわち言語能力(Kompetenz)の問題ではなく言語運用(Performanz)の問題であると思われる。

### 3. 結 語

以上EAの特異な行動ということの問題に、実は付加語的修飾句には二つの異なる派生の経路があることを明らかにし、その理由づけをおこなってきた。一つは典型的にはEAのかたちで現われる関係文構造が根底にある場合であり、今一つは付加語形容詞そのものが基底構造となっている場合である。つまり派生経路二元論である。しかしながら、生成文法学者の大勢は、依然として派生経路一元論であり、すくなくとも現状では明確な定式化が困難なように思われるけれども、可能性としてはすべての付加語的修飾句を基底関係文構造に一本化できるものと信じている。<sup>19)</sup> これに固執する理由はいくつか考えられるが、その主なものとして理論の簡潔性ということがあげられよう。<sup>20)</sup> つまり、もし二元論をとるならば、形容詞と名詞の間にある同じ選択制限を、名詞句の内部と文の内部で重複して述べなければならないという問題である。しかし本稿で観察してきたようなEAと単

一形容詞の配語行動上の差異、およびこれの支えとなる意味論的証拠、これらの事実から目を背けることはできないだろう。我々は理論上の簡潔性が事実の観察に優先されることがあってはならないと考える。

(追記：言語文化部外国人教師 Sonja Astley さん、IAY 講師 Inge Hoppner さんには、インフォーマントとして、筆者の質問に快くお答えいただいた。末筆ながらお礼を申し上げたい。)

## 注

- 1) 「前位形容詞の有標配列について」(北海道大学文学部独語独文科研究年報第6号 1979年) S. 49-68.
- 2) Smith, C. S. (1964), „Determiners and Relative Clauses in a Generative Grammar of English.“ In: Language 40, S. 37-52.  
Motsch (1964, 1965) 参考文献表参照。
- 3) Weber, H. (1971) S. 22-24.
- 4) この現象自体はすでに前掲の拙著「前位形容詞の有標配列について」の中でふれるところがあった。
- 5) Duden - Grammatik (1973) S. 631.
- 6) Duden - Grammatik (1973) S. 230ff. なお数形容詞にはさまざまなものがあり、その多くが Quasi - Determinativ であると考えてよいと思われるが、正確には個々の要素について具体的に検討してみる必要がある。ここでは主要と考えるものだけをとりあげた。
- 7) viel -, wenig -, zwei についてはインフォーマント間で容認可能性について差があった。しかし一人のインフォーマントについては、完全に容認可能との回答だったので、ここでは許容度を広くした場合という条件で、いずれも容認可能と判断した。なお zwei など基数の場合こうした実例を見つけるのはさほど困難ではない：  
die im Mai von Polisario - Front - Terroristen gefangengenommenen acht  
französischen Techniker  
die in dem Buch versammelten 41 ganzseitigen Reproduktionen (以上 FAZ)
- 8) Duden - Grammatik (1973) S. 270ff.

- 9) unerschrocken- の場合は位置の転換が可能であるが、この場合Komma が挿入されるのがふつうである。
- die unerschrockenen, im Gefängnis gestorbenen Aktivisten
- しかしこうした例は等位接続の構造とみなされるので、段階的な修飾構造が問題となっている本稿の議論に直接関わりあうものではなく、別に考える必要がある。
- 10) これに類する装置としては、Ross, J. R. ( 1967 ), „Constraints on variables in syntax.“ unpublished Ph. D. dissertation, M. I. T. の提案した出力条件 ( output condition ) や Perlmutter, D. M. ( 1971 ), Deep and surface structure constraints in syntax. New York. の表面構造制約 ( surface structure constraint ) がある。
- 11) solche zwei という構造は、筆者のおこなったインフォーマント・テストでは容認不可能との結果が出たが、Heidolph / Flämig / Motsch ( 1981 ) S. 263 では、この結合が許容されるとしている。例もここから採ったものである。
- 12) Engel ( 1970 ) S. 105 は、これらを Anaphorika と呼んでいる。
- 13) Agricola, E. ( hrsg ) ( 1973 ), Wörter und Wendungen S. 582 より引用。
- 14) Duden - Grammatik ( 1973 ) S. 243 より引用。
- 15) 関連する議論としては、安井稔他、形容詞 ( 現代の英文法 7 ) 研究社 1976年 S. 167ff.
- 16) Gruber ( 1976 ) S. 246 - 8.
- 17) この構造は männlich - に強勢が置かれた場合容認可能となる。しかしここでは無標の場合を問題としている。
- 18) これはいわゆる「知覚処理方式 ( perceptual strategy ) 」と関係してくる問題である。つまり、特性記述形容詞などの単一形容詞は、話し手と聞き手の認知のもっともふつうの仕方としては、その後には名詞か単一形容詞がくることが予想されるので、数形容詞のような Quasi-Determinativ がこれに続くとうまく感じられ、発話の自然な流れが阻害される。それゆえ容認不可能になるのではないかと考えられる。なお perceptual strategy という用語については、安井稔編、新言語学辞典 研究社 1975年 S. 559ff.
- 19) 例えば Motsch ( 1967 ), Sussex ( 1974 ) など。
- 20) Sussex ( 1974 ) S. 124ff.

## 参 考 文 献

- Bolinger, D. ( 1967 ), „Adjectives in English : attribution and predication.“ In : *Lingua* 18, S. 1—34.
- Duden-Grammatik ( 1973 ), Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. Mannheim.
- Engel, U. ( 1970 ), „Regeln zur Wortstellung.“ In : *Forschungsberichte des Instituts für deutsche Sprache* 5, S. 9—148.
- Gruber, J. S. ( 1976 ), *Lexical structures in syntax and semantics*. Amsterdam.
- Heidolph, K. E. , W. Flämig und W. Motsch ( 1981 ), *Grundzüge einer deutschen Grammatik*. Berlin.
- Motsch, W. ( 1964 ), *Syntax des deutschen Adjektivs*. (= *Studia Grammatica* 3 ) Berlin.
- Motsch, W. ( 1965 ), „Untersuchungen zur Apposition im Deutschen“ In : *Studia Grammatica* 5, S. 87—132.
- Motsch, W. ( 1967 ), „Können attributive Adjektive durch Transformationen erklärt werden?“ In : *Folia linguistica* 1, S. 23—48.
- Sussex, R. ( 1974 ), „The deep structure of adjectives in noun phrases.“ In ; *Journal of Linguistics* 10, S. 111—131.
- Weber, H. ( 1971 ), *Das erweiterte Adjektiv- und Partizipialattribut im Deutschen*. (= *Linguistische Reihe* 4 ) München.

( 大学院博士課程 )